

序言

R・C・ジェイミスン
水船教義 訳

ケンブリッジ図書館が所蔵する10世紀から11世紀にかけての時期に書写された2本の法華経貝葉写本Add. 1682およびAdd. 1683がここに写真版として複製された。

Add. 1682およびAdd. 1683は、ヘンドリク・ケルン (Hendrik Kern) が梵本からの英訳法華経、*The Saddharma-pundarîka or the lotus of the true law* (Oxford: Clarendon Press, 1884, Sacred books of the East ; vol. XXI) を訳出する際に使用した写本である。

ユジェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf) は、ケンブリッジの写本が欧州に将来されるずっと以前から法華経に関する仕事を続けていた。彼はパリにある3本の19世紀書写の写本を入手し、仏訳本、*Le lotus de la bonne loi, traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au bouddhisme* (Paris: Imprimerie nationale, 1852) のために使用した。ビュルヌフはこのうちの一つパリ・アジア協会蔵本no.2のみを使用して翻訳を完成させた。この写本は1837年にカトゥマンドゥ駐在イギリス公使ブライアン・ヒュートン・ホジソン (Brian Houghton Hodgson) が送ったものである。そのあとで、フランス国立図書館蔵の写本nos. 138-139 [P1] と nos. 140-141 [P2]を参照しつつ大部の注記を加えた。

ヘンドリク・ケルンと南條文雄の編集による梵文法華経、*Saddharmapundarîka*, (St. Pétersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, [1908-]1912, Bibliotheca Buddhica ; 10) に使用された写本は7本あり、そのうちの2本がこれらのケンブリッジ写本であるが、その2本の写本はAdd. 1683とAdd. 1684である⁽¹⁾。

ケルン南條本のp. [XIII]の凡例 (Preliminary Notice) で残念ながらケンブリッジ写本の写本ナンバーを間違えて記述している。“Ca.: Add. MS. 1682”は誤りである。ここにあるCaは、実際にはAdd. 1683 [Cb]である。“Cb.: Add. MS. 1683”も誤り

である。ここにあるCbは、実際にはAdd. 1684 [Cc]となるべきである。このことは「王立アジア協会会報」(*Journal of the Royal Asiatic Society*) 1927年版、p. 254の「仏教雑記」(*Buddhist miscellanea*)と題するニコライ・ミロノフ(Nikolai Mironov)の論考の脚注で説明されている。ヴィリー・バルフ(Willy Baruch)もこれらの誤りをその著「法華経論考集」(*Beiträge zum Saddharmapūṇḍarikasūtra* (Leiden: E. J. Brill, 1938))のp. 2とp. 7の脚注で指摘している。

今回出版の写真版では、このケルン南條本に対応するページと行が付記されている。

ケルン南條本以後の出版では、マイクロフィルムも含め、ケンブリッジ写本を参照したものはないようである。しかしながら(同写本を参照した)ケルン南條本が、その後のすべての刊本の出版に対して大きく寄与したことは衆知の通りである。

荻原雲來および土田周^{ちかお}[勝彌]は『改訂梵文法華経』(*Saddharmapūṇḍarīka-sūtram : romanized and revised text of the Bibliotheca Buddhica publication by consulting a Sanskrit MS. and Tibetan and Chinese translations* (3 vols, 東京 聖語研究会 1934-1935年))の中で、新たに別のサンスクリット写本を使用した。この新写本は写真版が発行されていたので利用可能であったが、写本の原本が参照された。書写年は1070年、河川慧海がチベット・シガツェの南方40キロにあるシャール寺から1916年に日本に将来したものである。(1908-1912年のケルン南條本に使用された河口本はネパールから直接伝えられたもので東京大学図書館のMS. No. 414 (old number 62)として所蔵されている。)

荻原土田本への大変有益な参考資料がその索引、伊藤瑞叡他編著の『梵文法華経荻原・土田本総索引』(*Comprehensive index to Wogihara and Tsuchida's Saddharmapūṇḍarikasūtram* (東京 勉誠社 平成5[1993]年))である。

ケルン南條本を基本にした、いま一つ重要で、すばらしく詳細なサンスクリット、チベット語、漢語のインデックスがある。江島恵教(代表)編著の『梵藏漢法華経原典総索引』(*Saddharmapūṇḍarikasūtra: Sanskrit, Tibetan, Chinese* (11 fascicles, 東京 霊友会 1985-1993年))と、同『蔵梵法華経索引』(*Tibetan-Sanskrit word index to the Saddharmapūṇḍarikasūtra* (同 1998年))である。

ナリナクシャ・ダット(Nalinaksha Dutt)がその刊本「梵文法華経」*Saddharmapūṇḍarikasūtram, with N. D. Mironov's readings from Central Asian MSS.* (Calcutta:

Asiatic Society, 1953, Bibliotheca indica ; 176 ; Issue number, 1565) を発刊、中央アジア写本がその姿を現した。その脚注に同写本の読みが印刷されていたのである。この刊本は、ケルン南條本のテキストを異読の脚注部分を除いてそのまま採用し、脚注にはミロノフのノートの異読を収録している。タイプ打ちされたミロノフのノートがカルカッタのアジア協会に保管されていたのである。またこの刊本は荻原土田本の異読やギルギット写本の読みを脚注に載せている。ダットはpp. xxvii-lviiiに英文による法華經の要約を掲載しているが、これは有益である。

パラシュラーマ・ラクシュマナ・ヴァイディア (Paraśurāma Lakshmaṇa Vaidya) は、その刊本「梵文法華經」 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960, Buddhist Sanskrit texts ; no. 6) によって「上記三つの刊本をもとにした調整版」を提供している。偈、固有名詞、「意義が難解で一般的でない語」の索引が付いている。

ケンブリッジ大学図書館には、6つの梵文法華經が所蔵されている。

Add. 1032 (19世紀 紙本) ライト (Wright) がネパールで入手 1874年に到着 [Cd, C₁, C³²,]

Add. 1324 (19世紀 紙本) ライトがネパールで入手 1875年に到着 [Ce, C₂, C²⁴]

Add. 1682 (10世紀あるいは11世紀 貝葉本) ライトがネパールで入手 1876年に到着 [Ca, C₃, C²]

Add. 1683 (貝葉本 1039年[1036年ではない]の書写) ライトがネパールで入手 1876年に到着 [Cb, C₄, C³]

Add. 1684 (貝葉本 1063/1064年の書写) ライトがネパールで入手 1876年に到着 [Cc, C₅, C⁴]

Add. 2197 (貝葉本 1093年の書写と記述 書き直されたフォリオには1686年書写と記述 最後にある単立したフォリオには1065年の記述) ベンドール (Bendall) がネパールで入手 1885年に到着 [Cf, C₆, C⁷]

(様々な略号がそれぞれの刊本で使用されている。Cの後にローマ字を付けるのが最も一般的である。ケルン、荻原、バルフ、湯山などが使用している。Cの後の数字を下付きにするやりかたは立正大学法華經文化研究所が(『梵文法華經写本集成』で) 1977年から1982年にかけて使用した。この番号の付け方は梵文法華經研究会が数字の下付きをやめた形にして(同「ローマ字本・索引」で) 1986年から使用している。Cの後の数字を上付きにするやりかたは渡辺が使用している。)

1968年にこれら6つの写本についての論考が掲載された。「ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本」『法華文化』No. 6 (1968年9月) pp. 5-7。その中に、4つのケンブリッジ写本のフォリオの写真が掲載されている。Add. 1682 folio 50 裏, Add. 1683 folio 97 裏, Add. 1684 folio 38 表, Add. 2197 folio 107 裏の計4枚。

Add. 1326 Dhāraṇīsaṃgrahaは、法華經の6つのダラニを集めたものである。湯山明はこれを*A bibliography of the Sanskrit texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (仮訳「法華經サンスクリット・テキストの書誌学的研究」) (Canberra: Australian National University Press, 1970) のAppendix II *Saddharmapuṇḍarīkamantradhāraṇī* (p.58)に列挙している。

この書は、四半世紀以上も前になされた研究であるにもかかわらず、今もお1968年10月までに世に出た数多くの著書、論考を記録したすばらしい書誌学的研究書である。「サンスクリット写本コレクションの所在地」(p. xi)を紹介した部分に、ケンブリッジ写本を列挙している。P. [xxxiii]の図版Iは、Add. 2197, 貝葉 folio 67 裏を複製したものである。その他の図版はネパール紙本、中央アジア紙本、ギルギット樺皮本の写本フォリオの例を示したものである。湯山のケンブリッジ大学図書館所蔵本に関する記述は、主としてpp. 12-13に掲載されている。湯山はp. 11の脚注にヴィリー・バルフの未発表の写本ノートに使用された写本を列挙している。このノートの存在は彼にとって報告すべき重要事であった。このバルフのノートは、16ほどのネパール写本の資料を使って異読を校合した、きわめて重要な研究業績である。この中には、ケンブリッジの6写本がすべて入っている。このノートは彼の死後パリのアジア協会の所蔵となった。湯山は、この1970年の著書の中でバルフが第1章を完成させ、第2章に取りかかっていたと報告している。『創価大学国際仏教学高等研究所年報』(*Annual report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the academic year 1997*) (p. 43) の中で、このように書いたのは、送ってもらった第1章と第2章の一部のコピーを見て、そう思い込んでしまったのであること、そして1971年にジャン・フィリオザ (Jean Filliozat) から、すべての章の校合がすでに完了しており、そのノートは3516枚にのぼるということを知らされた、と湯山は述べている。

今回ここに写真版として複製された2つの写本は、セシル・ベンドール (Cecil Bendall) のカタログ*Catalogue of the Buddhist Sanskrit manuscripts in the University*

Library, with introductory notices and illustrations of the palæography and chronology of Nepal and Bengal (Cambridge: University Press, 1883) の pp. 172–173で言及されている。ライトが収集したAdd. 1032, Add. 1324, Add. 1682, Add. 1683およびAdd. 1684はこのカタログに収録されている。ベンドールの収集したAdd. 2197はカタログが出版された後に図書館に収蔵された。この写本は、ベンドールの著書「ネパールと北インドにおける文献学的考古学的研究旅行——1884–5年冬」(*A journey of literary and archæological research in Nepal and northern India, during the winter of 1884–5* (Cambridge: University Press, 1886)) のp. 46のsection XI「仏教関係資料 (すべてネパールからのもの)」の中に書かれている。

ゆえに、今回複製された二つの写本は1873年から1876年にかけてダニエル・ライト (Daniel Wright) がネパールで収集した資料の一部である。彼はバトガオンやカトウマンドウの学者を介して写本を購入したのである。

ダニエル・ライトは1873年から1876年にかけて在カトウマンドウ・イギリス公使館付の外科医であった。サンスクリットの教授であったエドワード・カウエル (Edward Cowell) は、ケンブリッジでアラビア語の教授をしていたダニエルの兄、ウィリアム・ライト (William Wright) を通じて、ネパールに現存している写本類をケンブリッジ図書館のために新たに書写してもらってはどうか、という示唆を伝えた。Add. 1042は1873年に書写され、送られてきた5枚の見本であった。しかしながら、このことがきっかけとなって重要な古文書である原典写本がもたらされ、それらの写本がケンブリッジのコレクションの中核となったのである。

シュー・シャンケル・シン (Shew Shunker Singh) とグナーナンド (Gunānand) によるAdd. 1952の翻訳、王統史 (Vamśāvalī) 「ネパールの歴史」(*History of Nepal translated from the parbatiyā* (Cambridge: University Press, 1877)) は、ダニエル・ライトの編集である。この書はライトによるネパールの国と国民を概観する序論 (pp. 1–75) と彼がケンブリッジ大学のためにネパールで収集した写本の大まかなリスト (Appendix IX, pp. 316–324) が掲載されている。(この書の再版本は質的にも様々なものがある。ニューデリーCosmo社の1990年の再版本がよく出来ている。カルカッタSusil Gupta社の1958年の再版本は出来がよくない。製本もよくないし、ページ建てが違っていて、すべての図版をはずしてしまっている。)

エドワード・カウエルは、写本のカタログの作成を開始し、その仕事の完成

をベンドールに託した。一大事業であった。一つのカタログとして重要であるばかりでなく、サンスクリット仏教写本の書写年代の確定と写本の文字についての調査報告としても重要であった。

今回の出版は、当図書館所蔵のサンスクリット仏教写本では初めての写真版となる。

ケンブリッジ大学図書館には、世界のサンスクリット仏教写本の最も重要なコレクションの一つ——最重要という人もいるであろう——が存在している。多くのサンスクリット仏教文献の出版本や翻訳の中にケンブリッジ写本が引用されるのは、よくあることである。また、それらの写本はしばしば初期の文献であったり、時には最古のものであったりする。多くの閲覧者が原典を最新の注意をはらって利用するということが、このような破損しやすい資料についてはきわめて困難であるという事実を考慮しつつも、当図書館として、これらの資料をできるだけ広く利用可能にすることは最重要の課題である。

有名な当館所蔵の997年書写の「八千頌般若」貝葉本のすべての挿絵が（拙著）「智慧の完成」(*The perfection of wisdom* (New York: Penguin Viking ; London: Frances Lincoln, 2000))の中に収録されている。この本には1015年書写の「八千頌般若」貝葉本の多くの挿絵も掲載されている。このことは、当館の写本コレクションの所蔵本を（出版本の形で）最小限の金銭的負担でより多くの人々が入手できるようにしていくための、一つの転機となった。研究者は、当館コレクションの所蔵本のマイクロフィルムやCD-ROMが入手可能であることを知っているが、多くの一般の人々はマイクロフィルムやCD-ROMを注文するよりは、芸術的に仕上げられた出版本を見るのである。一本の貝葉本の全体を複製するということは、当館コレクションを広く利用していただく上で、新たな局面を開くものとなる。

法華経写真版の出版には伝統がある。多くの読者にとって、1916年に河口慧海がチベットのシャール寺から日本に将来したネパール系サンスクリット写本の写真版、池田澄達の『梵文法華経』(*Saddharmapuṇḍarīkanāma[m]hāyānasūtram* (東京 仏教宣揚会 1926年))は、ご存知のことであろう。このモノクロ写真版には日本語と英語の序文がついていて、この写本を河口慧海が入手した経緯を説明してある。フォリオは縮小して印刷されているが判読する困難は感じさせない。この1926年の版本が1956年に再び頒布された（東京 梵文法華経頒布会 1956年）。

一般の図書館に入っているのはこの時の頒布本である場合が多い。戸田宏文の報告によれば、1956年の「増刷」版は、おそらく30年前からの在庫を奥付のみを新しくして同じ表紙で製本したものであろうということである。戸田によると、写真版本体以外のページには凸版が使われている。凸版を使えばページの裏側にはふくらみが生じる。版を改めればそのふくらみが同じにはならないという。また1926年版と1956年版の紙の劣化の状態は同程度であるとのことである。写真版部分の製版は平版の一種であるコロタイプが使われている。これは薄いゼラチン膜の感光面が光線によって化学反応を起こし画像を刻む性質を利用した印刷法である。1926年の価格は15円、1956年の価格は3500円となっている。写本の原本は東京の東洋文庫に収められている。

渡辺照宏はその著『ギルギット出土法華経梵本』(*Saddharmapuṇḍarīka manuscripts found in Gilgit* (2 vols, 東京 霊友会 1972-1975年)) に、ニューデリーのインド政府国立公文書館のギルギット出土樺皮写本のマイクロフィルムから作成したローマ字本と写真版を収録した。これは、1930年代にカシュミール・ギルギットのストゥーパの遺跡から発見され、世界的な注目を集めた有名な写本である。

ラグヴィーラ (Raghu Vira) とローケーシュチャンドラ (Lokesh Chandra) もまた、「ギルギット仏教写本——写真版」(*Gilgit Buddhist manuscripts : a facsimile edition* (New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1974, Parts 9-10, Śata-piṭaka series, Indo-Asian literatures ; vol. 10)) に写真版を公表している。これは、ナリナクシャ・ダットの刊本との対照表が付いていて便利である (Part 9, pp. 3-12およびPart 10, pp. 1-7)。

ローケーシュチャンドラとハインツ・ベッヘルト (Heinz Bechert) のマイクロフィルム資料からの写真版は、中央アジアの一写本の写真を収録したものである (*Saddharma-puṇḍarīka-sūtra : Kashgar manuscript* (New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1976, Śata-piṭaka series, Indo-Asian literatures ; vol. 229))。各フォリオには、ダットの1953年の刊本のページと行の数字が記してある。ベルリン国立図書館とロンドンの大英図書館のコレクションの中央アジア断簡を、1956年にジャワーハルラル・ネルーがラグヴィーラに与えたロシアのマイクロフィルム (に収録された写本) に合体させている。このマイクロフィルムは、1955年にネルーがニキタ・フルシチョフとニコライ・ブルガーニンから贈呈されたものである。これは、1903年にロシア総領事N・F・ペトロフスキーが入手した有名なカシュガル写本のマイクロフィルムである。原本は今ロシア科学アカデミー東洋学研究所

サンクトペテルブルク支部にある。この写本は1912年のケルンの刊本で“O”と記された読みの根拠であり、同書のケルンの追記 (Additional note) pp. [v]-xiiには、彼が刊本で使用した、この写本とその他のカシュガル写本の断簡のことが論じられている。

この本に続くのが戸田宏文のローマ字版、『中央アジア出土・梵文法華経』 (*Saddharmapuṇḍarīkasūtra : Central Asian manuscripts, romanized text edited with an introduction, tables and indices* (2nd edition, 徳島 教育出版センター 1983年)) である。

その他の刊本や雑誌の論考では、写本の典拠となった何枚かの写本の図版を掲載しているものが多い。

今回の出版は創価学会の「法華経写本シリーズ」の第4となるものである。

シリーズの第1は、蔣忠新編の『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』 (*《旅順博物館藏梵文法華経残片——影印版及羅馬字版》 = Sanskrit Lotus Sutra fragments from the Lüshun Museum collection, facsimile edition and romanized text* (旅順 旅順博物館；東京 創価学会 1997年) (法華経写本シリーズ；1)) である。旅順港は多くの戦争の舞台となった場所である。ゆえに旅順がこのシリーズの写真版の最初の複製のために写本断簡を提供したことは、感動的であり、また適切なことである。

第2は、『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本 (No. 4-21)——写真版』 (*Sanskrit Lotus Sutra manuscript from the National Archives of Nepal (No. 4-21), facsimile edition = Saddharmapuṇḍarīkasūtram Nepāla Rāṣṭriya Abhilekhālayako Saddharmapuṇḍarīka hastalikhita grantha (la. ca. 21), pratilipi saṃskaraṇa* (東京 創価学会 1998年) (法華経写本シリーズ；2-1)) である⁽²⁾。この版は、写本原本の貝葉本の形式を踏まえた、綴じ本にしない伝統的な様式で製作されている。これとセットになるのが、戸田宏文の『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華経写本 (No. 4-21)——ローマ字版1』 (*Sanskrit Lotus Sutra manuscript from the National Archives of Nepal (No. 4-21), romanized text 1 = Saddharmapuṇḍarīkasūtram Nepāla Rāṣṭriya Abhilekhālayako Saddharmapuṇḍarīka hastalikhita grantha (la. ca. 21), romanīkṛta saṃskaraṇa 1* (東京 創価学会 2001年) (法華経写本シリーズ；2-2)) である。

第3は、クラウス・ヴィレ (Klaus Wille) 編の「カーダリク出土梵文法華経写本断簡」 (*Fragments of a Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra from Khādaliq* (東京 創価学会 2000年) (法華経写本シリーズ；3)) である。この書は、ベルリン国立図書館、

ミュンヘンの国立民族学博物館、ロンドンの大英図書館のコレクションの中央アジア出土の断簡を集め、カラー写真版、ローマ字転写版、対照表 (concordances) を収録したものである。

多くの研究者、とくに重要写本のコレクションから遠く離れたところに住む若い研究者にとっては、本シリーズの第4となる10世紀あるいは11世紀の仏教写本の写真版はきわめて有用であろう。このような資料があれば、原本の破損を心配しなくていいので、研究の可能性は大幅に広がる。当然のことながら初期写本の研究者は、原本を直接確認する前にマイクロフィルムやCD-ROM版を入手して仕事をしている。しかしながら、上質の写真版はマイクロフィルム・リーダーやコンピューター画面よりも実際の写本に近い感覚が得られる。これら三つの複製法がすべて貴重な手段であるには違いないにしても……。

これらの写真版で仕事をしたり、法華経写本を調べる時、興味深い参考資料が立正大学法華経文化研究所の『梵文法華経写本集成』 (*Sanskrit manuscripts of Saddharmapūṇḍarīka : collected from Nepal, Kashmir, and Central Asia* (12 vols, 東京 梵文法華経刊行会 1977-1982年)) である。この出版は「三十数種の梵文写本」(英文はp. vi, 日本文はp. vii)を対校したものである。当初の計画には、全15巻が予定されていたが、当初計画の13-15巻(写本断簡・文字表、対照表 (Concordance)、索引)は出版されなかった。(この出版では写本N1およびN2が逆になっている。残念な間違いではあるが、利用者がそのことに留意すれば対処することは容易である。)

現在刊行中なのが『梵文法華経写本集成——ローマ字本・索引』 (*Sanskrit manuscripts of Saddharmapūṇḍarīka : collected from Nepal, Kashmir, and Central Asia, romanized text and index* (東京 梵文法華経研究会 1986年-)) である。この出版は全14巻を予定している。これまでに2巻(1986年と1988年にそれぞれ1巻)が刊行されている。次なる巻が出ることを希望する。この出版は一大事業である。このような価値ある事業を引き受けられた方々は称賛に値する。ローマ字版を見る時は、少なくともマイクロフィルムその他の方法で元の写本がどうなっているかを常に確認することが賢明なやり方である。しかしながら、次のことは言うておくべきであろう。研究者の報告によると、この出版本は正確さに難があるので、そのことを予想しておいたほうがよいとのことである。利用に当たっては細心の注意が必要である。長期的には最初の2巻はやり直すことが必要かもしれない。この出版本では、ケンブリッジ大学図書館所蔵の写本に論及し(第1巻

英文はp. (10)、日本文はpp. (63)-(64))、どうやって正確な写本の書写年の決定をするか、また書写年の厳密な解釈につての議論がどのように行われているか、といったことに関心のある人には有用な言及がある。そのなかには、クラウス・フォーゲル (Claus Vogel) の “The dated Nepalese manuscripts of the Saddharma-puṇḍarīkasūtra” (「梵文法華経ネパール写本の書写年代」) (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1974, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-Historische Klasse* ; 1974, 5) と Luciano Petech の *Mediaeval history of Nepal (c. 750-1482)* (「中世ネパール史」) (2nd thoroughly revised edition, Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1984, *Serie orientale Roma* ; 54) がある。(この「ローマ字本・索引」では、写本N1とN2は逆になっていない。正しく記述されている。利用者はN1、N2としてローマ字転写された部分と、12巻本「集成」にN1、N2として間違って印刷された写真の部分に容易に気付くであろう。P. 83 (日本語ではp. 84) の “Editorial notes” (日本語では「編集注記」) の (7) にこのことが書いてある。)

我々はケンブリッジ大学図書館コレクションの他の写本の写真版の作成を提案される方が現れること望むものである。多くの収集家たちが書写年のある世界最古の挿絵入りインド写本Add. 1464、書写年のある世界最古の挿絵入りネパール写本Add. 1643、あるいは挿絵はないが書写年が859年のAdd. 1049の、完全な複製を入手したがつているという事実には私は驚いている。

この写真版製作に当たり、とくに次の方々にお礼申し上げたい。このプロジェクトを陰で支え主要な推進力となって尽力された東京の東洋哲学研究所の水船教義氏、有益な注記を書いていただいた徳島大学の戸田宏文氏、さらに「あいさつ」をいただいた秋谷栄之助氏、メイドウンヘッドの東洋哲学研究所ヨーロッパ・センターで連絡を担当されたジェイミー・クレスウェル氏に感謝申し上げます。そして、とくに「発刊の辞」を寄せられた創価学会インタナショナル会長池田大作氏に感謝の言葉を申し上げます。それは創価学会が梵文法華経の3系統の伝承である、ネパール系、中央アジア系、そして将来的にはギルギット系の写本を世に知らしめるという、このような感動的な事業を推進しておられるからである。すべての系統の様々な写本が世界各地で保存されている。ここに複製された二つのネパール系のケンブリッジ写本は、広く研究に活用されることであろう。このことは数年前には予想することもできなかったことである。

2002年3月15日

訳注

(1) 「写真版」では「その2本の写本がAdd. 1682とAdd. 1683」とあるが、この転載版では「は」を「が」、「1682」を「1683」、「1683」を「1684」にそれぞれ訂正した。英語原文に誤りはない。

(2) 正しくは「法華經写本シリーズ; 2-1」である。

(R・C・ジェイミスン／ケンブリッジ大学サンスクリット写本管理責任者)

(訳・みずふね のりよし／東洋哲学研究所委嘱研究員)

(本稿は、2002年3月26日に出版された『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本 (Add. 1682およびAdd. 1683写真版)』の「序言」を転載したものです。)